ドクドク
ジャキ
ガメ
ガ

天界――
ラスタ上空
明かりのツいてるヘヤ…
アレかな？
ドン

よい
しょっ
と…
来てやったよ
第二天使長
どーしたのよ
キュウにヨびつけたりしてさ

ラスタまで
トんでくるの
ケッコウ、タイ
ヘンなんだけ…
ど……
ぎゅ

……い

は!?

遅い…

ここに

来ないのかと

思った…

ぞ…

ぎゅっ

…ゲス
ニヤニヤ
ムシャ、ボミジが
あるじゃないかっ
ゴッ
第二天使長!!

アンタさぁ…

ほんっとにスナオじゃないよね

うるさい

ネツがあるからラスタに来て

カンビョウしてってそういえばいいのにさ

……

ぽそ

……のか？

会いたかったと

ん？

ナニ？

いまアタシに
ナニか言った？

素直に言えば

ここに来てくれたのか？

ビクッ

……

ドン

ドン

えっと…

ナニ…？

今宵は

雨だな

ダルカに帰るのも

面倒だろう？

こんな状態だ
寒気もして寝つけない
一晩そばにいてくれないか？
!?
そして…

そして私の…

ヒャッ

ハッ

ハッ

ハッ

ビブラ菌

？？

？！

私の…

風邪が伝染って
くるしむがいい
クソがァ……

アンタやっぱり
サイテーだよ！

ちかよるなっ

バカだから
風邪をひかないかも
しれないな……

ルヘ

うるさいっ

悪魔声聞こえてんだよっ ルヘ

第一悪魔長をぶっとばすために、人界にオリたアタシは、ウェンデルの森の木の上で休んでいた。

『なぜ勝てない。やはり、同化の力か？』
『ならば、あの女…。第三悪魔長をうまく利用できれば…』

アタシをリヨウするだって？バカなこと言ってるヤツがいるんもんだ。いったいダレだと思って木の下を見れば、いつかラスタで見た男の天使だった。

「うっわ…。天使で黒魂声があるヤツなんているんだね。ハジメテ見たよ。」

アタシたち悪魔にはイケナイことなんてオミトオシ。魂声をキかれた第三悪魔長がアタシをニラむ。

『黒魂声だと…。この女、私の心を読んだのか…。』
「そうだよ。ぜーんぶ、ツツヌけ。」

第二天使長のミケンのシワがフカくなる。クヤしがる天使のカオを見るのはキブンがいいね。

「まぁ、いいけどね。アタシもアンタのことをリヨウしようと思ってたから。」
「……」
「オタガイサマ、ってやつだよ。」

第三天使長はダマったまま。今度は黒魂声もキこえない。でも、アイツらに勝つためには、アタシはどうしてもコイツと組まなきゃならない。

「アンタ、アタシと組まない？」
「……フン。いいだろう。」

リヨウするためだけに組んだコイツと、まさか同化するなんて、このときは思ってもいなかった。同化して、ココロもキオクもぐちゃぐちゃになって、そのあと、刻の牢獄をいっしょにタビして…。そしてフォロン様のところに、ふたりでモドってきた。

いまでもやっぱり、天使のことはキライだし、ビブラのコトもスキじゃないけど。

「まぁ、キライじゃないかなーって。」

アイツのココロの声をキいて、キョーカンしてあげられるのは、きっとアタシくらいだし？アンタのカコを知ってるのも、どうせアタシだけなんでしょ。

しょーがないから、アタシがミカタでいてアゲルよ。

アマノジャクメガ

おい、着れたか？

うん、タブン

天使の服ってなんかヘンなカンジする…

もぞっ

早くしろ連れて行ってやらんぞ

ハァ!?

ケサまでずっとカンビョウしてやったでしょ!?

…うるさい

ラスタのオイシイものオゴるってヤクソクでしょ!!

さっさと行くぞ

ビブラ様!! またいつでもどうぞ――!!

ほら

約束の品だ

ふぇeee

第一天使長を潰すため、第二悪魔長を利用しようと考えながら歩いた森の中。

「うっわ…。天使で黒魂声があるヤツなんているんだね。ハジメテ見たよ。」

木の上からその声は降ってきた。見上げた先には、真っ赤な角と深い青の羽を携えた女悪魔が立っていた。

『黒魂声だと…。この女、私の心を読んだのか…。』
「そうだよ。ぜーんぶ、ツツヌけ。」

ターゲット本人に心を読まれ、この女を手懐けようという計画はすでに破綻。さて、どうするかと思ったが、向こうも私を利用しようと探していたということらしい。聞くと私とコイツの目的は同じ。変に逆らって闘うより、素直に手を組んだ方が得だろう。それに、いざとなればこんな女ひとり抑え込める。第一天使長どもを相手にするよりはるかに容易い。

「…ところで、私たちは天使と悪魔。敵同士だな。」
「そーだけど。それがナニ？」
「手を組むのはいいが、裏切らないという保証がない。同化して体を共有しているわけでもないから、やろうと思えば隙をついて相手を殺せる。」
「ハァ？そんなことカンガえてるの！？メンドーなやつ！」
「秘密を共有するというのはどうだ？それも、互い以外にバレたら死にたくなるような秘密がいい。……そう、例えば」

こういうヤツは、力で負かしてもあまり応えない。それどころかつっかかってきて余計に面倒だろう。見れば、どう見ても色恋沙汰に縁がない。そういうヤツには、こういう口止めが一番効く。

「……なっ！！！え？ちょっと、どーゆーコト！？」
「天使なんぞとキスをした裏切り者だと、ダルカの兵士や第一悪魔長に言われたくないだろう？」
『……ア、アタシの！！ファーストキスがっっっ！！！』
「ほぅ。悪魔でも白魂声を持つヤツがいるんだな。」
「白っ…！？まさか、アンタアタシのココロをヨんだの？！」
「安心しろ。私もお前が初めてだ。貴様なんぞに自らキスをしたと、ラスタの者に知れたら死にたくなるほど恥ずかしい。よかったな、これでお互い様だ。」
「うるさい！くそぉ、いつかぜったい泣かしてやるッ！！」

まさか、こんなやつと同化することになるとは。しかも、同化の影響で知られたくない記憶までヤツに渡ってしまったようだ。

「……まぁ、他のヤツに知られるよりは良かったのかもしれんな。」

私の過去を知ろうが何食わぬ顔で共に旅をし、フォロン様の元へ帰ってきた今となっては、私はアイツ……トリューをそれなりに信頼している。

【 奥 付 】

発行日＊2018.02.25.

発行＊かめらりぜ。

印刷＊キンコーズ様

@calamele_rockey

k.galf0207romrom@gmail.com

この本は非公式の二次創作作品です。公式各位とは一切関係がありません。
内容の無断転載、複製は禁止です。
ネットオークションへの出品はご遠慮ください。

Presents by GALF KAMEIDA.
2018.02.25.